

## 気仙沼における東洋大学学生ボランティアセンター の支援活動

子 島 進\*

須 永 晃 代\*\*

### はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東日本の沿岸地域に壊滅的な津波被害をもたらした。宮城県最北部に位置する気仙沼市では、流出した重油により大規模な火災が発生し、これによって水産加工業の集積する気仙沼湾に面する地域が焼き尽されるなど、被害が拡大した。人口7万4千あまりの同市で16,444戸が全壊し、死亡および行方不明者数は1,419人に達した(平成23年6月18日現在)。本論文は、この気仙沼市における東洋大学学生ボランティアセンター(以下、学ボラ)の活動についてとりあげる。支援活動の概要を述べたうえで、中心メンバーへのインタビューから見えてくる成果と課題についてまとめることとする。



写真1 安波山から見た気仙沼(2012年9月)

学ボラは、2004年の新潟中越地震を契機として誕生した学生サークルである。甚大な被害を受けた新潟県山古志村(現在は長岡市と合併)の復興支援にボランティアとして参加した学生たちが設立した。当時は『オレンG』という名称であった。その後も、彼らは東洋大学に対するさまざまなボランティア活動の要請に自ら応えとともに、一般学生に対するボランティアの紹介窓口として機能したこともあり、2006年に『東洋大学学生ボランティアセンター』へと名称を変更した。同年に朝霞キャンパス、2007年に川

越キャンパス、そして2012年には板倉キャンパスにも学ボラが設立された。白山キャンパスを中心拠点とし、キャンパス間で連絡を取りながら、活動を行っている。メンバーは、白山キャンパス約150名、朝霞キャンパス約70名、川越キャンパス約50名、板倉キャンパス約40名の約310

\* 東洋大学国際地域学部: Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

\*\* 株式会社ディアーズ・ブレイン: DearsBRAIN

名から構成されている(2013年現在)。

学ボラの活動内容は、山古志村支援、海岸清掃、フェアトレード、児童福祉など多岐にわたる。本論文で取り扱うのは、気仙沼市における復興支援である。この活動は現在も継続中であるが、ここでは2011年ならびに12年度(2013年3月まで)の活動について記述している。なお、敬称は省略し、所属は当時のものとなっている。

本論文の成立過程について、簡単に触れておきたい。2011年4月に子島は学ボラの役員である小泉範明(社会学部社会文化システム学科3年)、幅野一輝(社会学部メディアコミュニケーション学科2年)と出会った。当時、震災に関する文化人類学者のネットワークを通じて連絡をとりあっていた岩井雪乃からの紹介であった。岩井は早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターの助教であるが、当時は東洋大学の社会学部で非常勤講師を務めてもいた(早大生による震災支援に関する岩井の論考として岩井2012aがある。岩井2012bも参照のこと)。6月、気仙沼で支援活動を開始したシャンティ国際ボランティア会(SVA)を、子島は訪問した。そして、小泉ら学ボラのメンバーと一緒に学内でフェアトレード商品を販売し、収益をSVAに寄付した。翌2012年6月、気仙沼支援の中核を担う幅野が、子島の担当講義『地域とボランティア』で活動報告をした。

このような交流を経て、子島ゼミの学生であった須永晃代が、学ボラの支援活動を卒業論文のテーマとすることになった。須永自身が気仙沼での支援活動に参加しており、学ボラの中心メンバーたちとも面識があったことから、インタビューを行った。実施日は次のとおりである。幅野一輝(2012年6月22日、2013年1月23日、5月23日、10月25日、11月14日)、金子涼(2013年10月25日、11月12日、12月10日)、富山晴菜(2013年11月15日、11月20日、12月1日)。

これらのインタビューをもとに、須永は卒業論文『気仙沼市における東洋大生のボランティア』をまとめた(2013年12月提出)。これまで学生のフェアトレード活動やNGOの被災地支援を論考にまとめてきた子島(子島他編2010、子島2012参照)は、学生主体の活動の重要性に気づくこととなった。2014年度春学期から夏休みにかけて、金子に追加のインタビューを繰り返し、内容を再編集した。その結果が本論文である。なお、本文中の写真はすべて学ボラから提供を受けている。

まだ最初の2年間の活動の輪郭を描いただけに過ぎないが、今後気仙沼を訪れ、関係者にもインタビューすることで、より精確で詳細な記録を残したいと考えている。

## 1. 支援開始

復興支援の始まりは、震災当時の学ボラ代表である幅野一輝へのインタビュー(2012年6月22日)から再構成すると、次のとおりである。

宮城県名取市出身の幅野は、震災後2、3日経っても家族と連絡がとれなかった。宮城県出身の友人たちとスカイプで情報交換するうちに、新潟・山形経由ならば宮城へ帰れるとわかり、帰郷することにした。バスでは電話で話すうちに泣きだす乗客がいるなど、重い空気が流れていた。帰郷すると、両親からは「なんで帰ってきた」と言われた。自分たちは大丈夫だと両親が妙に明るくふるまっていて、暗い雰囲気は払拭しようとしていると、幅野は感じたという。

実家に被害はなかったが、自転車で20分くらい走ると、被害を目の当たりにすることとなった。かつての住宅地は砂でドロドロとなり、まるで映画のワンシーンのようだった。幅野は自分の地元が被災地であることを実感し、大きな衝撃を受けた。学ボラのメンバーに協力を促そうと写真を撮影したが、地元を見せ物にするような気持ちになり、胸中は複雑だった。

東京に戻った幅野は、震災発生から1か月後に開かれた学ボラ総会にて、東北支援のメンバーを募った。しかし、メンバーは集まったものの、すぐに被災地に入ることはできなかった。大人数の学生が被災地で活動するには、大学からの資金援助が不可欠となるが、大学からの活動許可はすぐには下りなかった。その理由としては、原発事故ばかりでなく、当時はまだ交通網が完全に復旧しておらず、被災地域の情報もあいまいだったという点も挙げられるだろう。これらの要因がからまって、活動許可はすぐには出なかった。

そのため震災後の1ヶ月間は、募金活動を続けることとなった。3月17日から文京区区民センターにおいて連日のように募金を呼びかけ、25日までに合計で160万円を集めた。また東洋大の卒業式（3月23日）、入学式（4月6日）、そして、3夜連続の緊急シンポジウム（4月26-28日）でも募金を呼びかけ続けた。これらの活動で集まった総額は、210万5,731円となり、その全額を日本赤十字社に寄付した。

ゴールデンウィークに入ると、幅野と小泉ら4名のメンバーは宮城県内の災害ボランティアセンター（ボラセン）を訪れ、受け入れ先を探しまわった。しかし、40～50人もの学生の受け入れ先となってくれるところは簡単には見つからなかった。山元町、亘理町、岩沼、多賀城、石巻などを訪れた後に、気仙沼市社会福祉協議会が設置したボラセンに受け入れてもらえることとなった。

7月1日、学ボラの40人は白山キャンパスから大型バスで出発し、3日まで気仙沼で活動を行った。これは、その後開始となるTOP（後述）のためのパイロット・プロジェクト的な性格を有するもので、大学から交通、宿泊、食事の経費面で資金援助を受けていた（装備は個人負担）。岩手県一関のホテルに宿泊しながら、ボラセンの指示に従い、気仙沼市階上（はしかみ）の田んぼで、がれきを撤去した。

こうして、学ボラの気仙沼での活動は、東洋大学の東北応援プロジェクト（TOP）の一環として正式に始まることとなった。TOPは、被災地の復興に向けて、何らかの力になりたいという学生の思いを受けとめた大学が、活動場所への交通費や宿泊費を全額補助する形をとっている。東洋大生によるボランティア活動は、気仙沼に加えて、東松島、岩手県遠野（大槌町など沿岸部での支援活動の拠点）、大船渡、陸前高田市などでも行われた（活動先を変えながら、2014年度時点も継続中である）。

## 2. 気仙沼での支援活動

### 2-1 2011年夏休みの活動

活動が始まった矢先に、学ボラは大きな問題に直面する。8月3日から10日にかけて、集団で食中毒にかかってしまったのである。気仙沼入りした第1陣（第1クール）の学生は宿泊所を確保できなかったため、公園でキャンプを張っていた。きわめて不便で不衛生な環境の中、（おそらく）



使いまわした食器が原因となり、多くの学生が食中毒にかかった。現地入りしたとたんに、自分たちが世話をしてもらうことになってしまったのである。このときのことを回想して、幅野は次のように述べている。「力になりたいと思って行ったのに、逆に助けられ、情けなかった。社協の職員さんから『こんなときに来てくれた、その気持ちだけで十分だよ。また将来遊びにおいで』と暖かい励ましの言葉をかけていただき、これで止めるわけにはいかなくなった。助けていただいた恩を返さなくてはならないと思った」

さらに、ボラセンからは、第1と第2クールの期間中、上廿一（かみにじゅういち）自治会館を貸してもらえることとなった。そして、この自治会館に滞在中、東洋大学の卒業生である小野寺克弘に出会う。小野寺は大学の広報を見て、「ぜひ会いたい」と連絡をしてきたのである。小野寺が佐藤健治（気仙沼市議会議員。サニーデイズ気仙沼顧問）に話しを持ちかけてくれたおかげで、その後は田中一区自治会館を貸してもらえることとなった。

小野寺・佐藤両氏と出会ったことで、学ボラの活動範囲は大きく広がる。小野寺からは特別養護老人ホームであるキングスタウンでのボランティアを、佐藤からは、九条小学校と南気仙沼小学校（2012年3月閉校）の学童保育のボランティアを紹介してもらえたのである。

震災後の最初の夏休みとなったこの時期には、全部で10クールの活動が行われた。1つのクールでは基本的に10名の学生が参加する。この間、主として行ったのは、がれきの撤去と泥の掻き出しであるが、ほかにも以下のさまざまな活動に従事している。

- ・仮設住宅での交流会、引っ越し、支援物資の搬入
- ・写真展のための写真の製作
- ・被災した住宅の整理・清掃
- ・EM（有用微生物群）の散布
- ・学童保育
- ・就労支援活動
- ・ブドウ園での収穫祭の手伝い
- ・ビニールハウスでの草むしり

幅野はずっと気仙沼に滞在し、新しい学生が来ても情報の共有が出来るように努力した。こうして、10人1組で1週間活動すると交替という「クール制」の基本の形が作られていった。その後も、夏・冬・春の長期休暇、さらにはゴールデンウィークを利用して、クールを組んでの活動を継続していく。気仙沼におけるTOPの活動は学ボラが主体となっているが、サークルに加入していない学生に対しても、学内に掲示するポスター等で参加を募っている。



写真2 支援物資の搬入作業(2011年9月)

秋学期が始まると、メンバーたちは東京で活動を行った。被災地の現状を広く伝えるため、学園祭で「復興支援写真展」を開き、復興支援グッズを販売した。11月にはTOPの報告会や学長との座談会も開かれた。12月には0泊1日のツアーを行った。これは次の春休みまで活動が長く空いてしまうことを懸念して実施された。

立教大学のボランティア団体と互いの活動についての情報交換も行った。幅野が履修した講義の担当者が、立教大学の教員であったことから、このつながりは生まれた。新宿区社会福祉協議会から要請を受け、新宿区の社協、立教大生やその他多くの大学とともに「ジョイスタディプロジェクト」が開始となった。福島県から新宿区の戸山団地に避難した人々への支援活動である。子供たちに勉強を教えたり、チャリティ・フットサルを開催するなどの活動を行った。

## 2-2 2012年春休みの活動

計7クール、約60名の学生が参加した。夏の段階で入れなかった搜索区域で、がれきの撤去を行った（この時期、泥は凍りついており、泥掻きはできない）。気仙沼のボラセンは冬までに閉鎖されるとのことがであったが、いつ閉まるのか不明瞭だった。個人の受け入れが終わり、団体も制限されるようになっては、ボランティアの受け入れ先が無くなってしまう。そんな時、受け入れ先となってくれたのが「気仙沼復興協会」(KRA)である。

KRAを通して、学ボラは変化するニーズに合わせて活動を行うことができた。この時期には、仮設住宅での庭づくりや木の剪定、学童保育、障がい者の就労支援活動などを始めている。また、現地で出会った気仙沼ユネスコ協会からの紹介で『先生元気プロジェクト』を知ることになる。これは、NPO法人「体験型科学教育研究所リアルサイエンス」が主催するイベントの一つである。同NPOは体験型教育を通して、子どもたちの主体性や問題解決能力、協調性を発展させる手法を培ってきた。これを幼・小・中・高等学校の教員や青少年教育に携わる人々を対象に提案するものである。3月25日、気仙沼市立条南中学校において、このイベントは開催された。学ボラのメンバーは、目黒ユネスコ協会のボランティアとともに、その運営補助に当たった。

3月11日には、気仙沼市総合体育館での慰霊祭に参加した。



写真3 イチゴ農家での苗付け作業（2012年9月）

## 2-3 2012年夏休みの活動

2012年8月7日から9月21日の夏休み期間中、1クール4泊6日の全8クールで、約80人が気仙沼で活動した。メンバー構成は、1クール10名で、学ボラのメンバーが4名、一般学生6名である。この時の活動を分類すると、次のように5つに分けることができる。

- 1) まつり（みなとまつり、八日市まつり）
- 2) 学童支援（A、B、C）
- 3) 海岸清掃
- 4) 写真の洗浄

- 5) 障害者の就労継続支援
- 6) 農家の手伝い

このうち、繰り返し行われたのが、2) 学童支援、3) 海岸清掃の5) 障害者の就労支援の3つの仕事である。

## 2-4 2013年春休みの活動

春季気仙沼ボランティアも、夏季気仙沼ボランティア同様4泊6日の全10クールと特別クールで構成され、計約100人の学生が参加した。

活動を内容に従って分類すると以下のとおりである。

- 1) 就労支援活動
- 2) 学童保育
- 3) K R Aでのログハウスの再建支援
- 4) 出店の手伝い
- 5) 農園や、田んぼ、畑の手伝い
- 6) 仮設住宅の清掃

以上の活動の中で、もっとも集中的に行われたのが、1) 就労支援活動、2) 学童保育、そして3) K R Aでのログハウスの再建支援であった。

東京でできる復興支援活動として、引き続きジョイスタディプロジェクトにも力を入れた。戸山団地内にある集会所を借りて、「さんさん広場」という場を設け、子どもたちとの交流や、学習支援などを行った。交流の場として、東京生活で溜まったストレスの解消や、避難者と団地住民との新たなコミュニティ形成を促している。

また「学生連合 とーほくらぶ」が、立教・明治学院・文教・東洋の4大学によって結成された。2012年2月5日には、新座市の「きたにフェスタ」に参加し、「石巻焼きそば」や「こまこま汁」など郷土料理のブースを出店している。学ボラは、それぞれのブースを手伝う形で、20名程度が参加した（とーほくらぶとしての活動は、他大学の参加人数の減少や復興支援に対する各大学の方向性の違いから、2013年の冬あたりから行われなくなっていった）。

## 3. インタビューから見えてくる成果と課題

ここでは、気仙沼での支援活動の中心メンバー2名へのインタビューをもとに、学ボラの支援活動の成果と課題についてまとめることとする。まず、金子涼（法学部法律学科3年）、つづいて富山晴菜（社会学部社会福祉学科4年）へのインタビューを紹介する。

### 3-1 金子涼

1年生の5月から現在（2013年12月）まで、長期休暇があるたびに活動してきました。30回くらいは行きました。K R Aの関係者からは、いつも「来てくれて助かります」、気仙沼小学校など



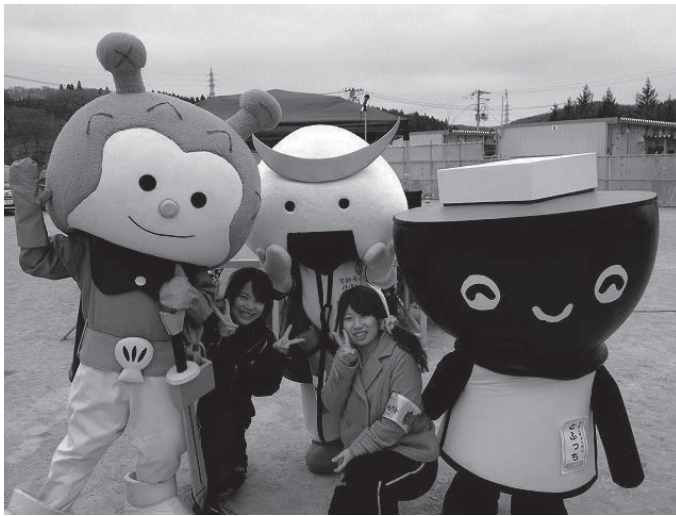


写真4 「元気！ご当地マーケット」では着ぐるみを担当  
(2013年3月)

でも「東洋大学さん、いつもありがとう」と言っていたいています。「おにいさんたち次はいつくるの？」と子供たちから言われるとうれしいですね。気仙沼には大学がなく、若い世代はみんな外に出ていってしまっているので、「若い力を見ると元気になるよ」というのは実感だと思います。

正直なところ「東洋大学が来てから、大きく変わったよ」と言われることはありません。ただそれは、僕らが手を差し伸べなくても、自ら復興を遂げるだけの力を、気仙沼の方々が持っているからだと思えます。そうした強い人々を、僕らが引っ張っ

ていくのではなく、少しでも早く元気になれるような、ちょっとした「お手伝い」や、元気になるまで「見届けること」が僕らの役割です。

「僕たちのことをどう評価していますか？」とは、とても聞けないので本当のところはわかりません。ただ、被災地を訪れるボランティアが確実に減ってきているなか、合計で500人以上の学生を派遣してきました。3年目を迎えた今でも、夏休みや春休みには、50人を超える人数で被災地を訪れています。継続してきたこと自体が大きな成果だと考えています。

現在もボランティアをさせていただけている環境があるのは、困難や失敗にも正面からひとつひとつ向き合ってきたから。ボランティアは成果を数字で表すことは難しく、相手との信頼関係がすべてです。

2年間活動してきた小学校で、「もう来なくていいよ」と言われてしまったことがあります。学生の服装や髪型が、先生方が求めるレベルよりも低く、子供たちを任せられないということでした。自分達では大丈夫だと思っていたので、気の緩みがあったと言わざるを得ない。一度失われた信頼は、取り戻すことはできないと痛感するとともに、他の活動を引き締める機会となる出来事でした。髪型や服装だけが問題だったのではなかった。名札をちゃんと作らなかったり、活動中にうたた寝をした学生もいました。他にも自分たちでは気がつかないところで至らない部分があり、それが積みもり積もった結果だと思います。

意識して、小学校やKRAの現場に、必ず以前に1回は行ったことのあるメンバーを入れるようにしています。いくら「同じ東洋大学の学生」とは言っても、来ているメンバーがまるっきり違えば、別の大学が来ているのと同じです。受け入れ先に見てみたら、絶対に同じ人が来るほうがうれしいはず。「この人たちはずっと来てくれている。忘れられていない」と思ってもらえる。顔を覚えてもらっているのは10人くらいで、3回は行かないと覚えてもらえません。繰り返し行っている僕らが「東洋大学の顔」なので、特に自覚を持って活動しなければならないと思っています。

学ボラに求められていることは、「今後も通い続けること」だと思います。山古志村でのボランティアは、学ボラが最初に訪れてから来年で10年目を迎えます。現在は、主にお祭りを手伝っています。気仙沼でも今後末長く活動を続けて、復興が落ち着いても、山古志のような関係が気づ

いていけたらと思っています。

そのためにはまず、「先輩の思いをいかに引き継いでいくか」という点が大きな課題です。先輩たちがどんな思いで活動を始めたのか、続けてきたのか。それを理解していれば、大きな失敗は絶対に起こらないはず。また震災直後を知らない、あるいは震災を覚えていない世代もいつかは出てきます。そうした世代に、被災当時の様子や人々の負った傷をいかに理解してもらうかが、活動の質に大きな影響を与えてくると思います。

「東洋大にぜひ来てほしい」と言われるためには、今までのように言われたとおりにやっているだけではだめです。がれきの撤去などが一通り落ち着いた今、求められているのは「企画を持っていくこと」だと考えています。「勝手に楽しいことを持ってきてくれる」学生であれば、「また来てほしい」と思ってもらえるはず。後輩たちも、子供たちとお祭りをする目玉企画を作っているようです。学ボラが気仙沼へ行き続けるためには、「後世につないでいくこと」と「企画を持っていくこと」が求められていると思います。

ここで一点補足しておきたい。今、求められているのは「企画を持っていくこと」という点について、2014年11月時点で金子は再考し、次のように述べている。

「勝手に楽しいことを持ってきてくれる」学生であれば、「また来てほしい」と思ってもらえるはずという部分について、今は少し違和感を覚えています。たしかに昨年であれば、この考え方でしっくりとできていたのですが、今はまたフェーズが変わってきているのかもしれない。と言うのも、この「勝手に楽しいことを持ってきてくれる」学生や社会人が、ただの押し付けになっているという例を、2014年夏ごろから多く聞くようになったからです。

たとえば、以前私たちが企画した子供向けのイベントには100人以上が集まりました。しかし、昨年後輩たちが行った同じ趣旨の企画には、天候不良があったとはいえ、10人以下しか集まりませんでした。比較的落ち着きを取りもどし、好きなものを選び、好きなことに時間を費やすことのできる方が増えてきた今、昨年と同じような企画を持っていったとしても、少し白けてしまう雰囲気があると私は感じています。

阪神・淡路大震災におけるボランティア活動の社会学的研究において、西山は次のような指摘をしている。緊急救援や避難の時期がとうに過ぎ去った段階になっても、ニーズを自分の観点からしか探せず、結果として自分のスタイルを押しつける「自己満足的なボランティア」が、被災者の自立を妨げてしまった。もちろん、ボランティアの中には壁に突き当たりながら、ニーズに対応した活動を模索していった人たちもいた。この段階で求められるのは、ボランティアが自己と相手の双方に配慮しながら、関係性のなかで被災者の「生」を支えるという支援のありかたであった（西山2007:117,8）。金子の再考は、このような変化を察知してのものであろう。今後、学ボラが方向性を考えていくうえで、きわめて重要な気づきであると思われるので、追記しておきたい。

### 3-2 富山晴菜

初めて気仙沼へ行ったのは、2011年6月のおわりでした。回数としては、およそ15回です。



2011年の年末に0泊3日の弾丸企画をやったり、凧揚げイベントに合わせて行ったりと、いろいろ企画してきましたが、基本的には夏・春の長期休暇にクールを組んで行く形です。

学ボラがどう評価されているのか、直接聞いたことはありません。失敗で怒られたこともあります。ですが、続けさせてもらえているので、ある程度評価してもらっているかと思います。活動の終わりにあいさつに行くと、「次もよろしくお願いします」という言葉をいただけるので、そう感じています。

震災当初は、目に見えて大変さとか辛さとか悲惨さとかがわかるし、成果も目に見えて感じられました。今は成果を実感することが本当に難しいです。その分、私たちには伝える義務があると思っています。参加学生には、ひとつひとつの活動の意味や意義、震災当初の気仙沼のこと、私たちを支えてくださっている方々の存在など、目には見えなくとも何かを感じとってほしいと思っています。

私個人としては、気仙沼で多くのことを学んだと感じています。命がけで津波から逃げたときの貴重なお話を聞かせていただいたり、どう逃げればいいのかや、日頃の備えなど、いざというとき役立つことをたくさん教えていただきました。なによりも、たくさんいただいた「ありがとう」の言葉の重みは、一生忘れません。

運営する側としては、関係先とのかかわり方や、学生への声かけ、クール長への配慮など、さまざまなスキルが身に付いたと思います。被災地で活動している学生団体は、東洋大のほかにもたくさんあります。しかし学生だけで行っているところは、まず聞いたことがありません。企画段階では大学の職員と話し合い、金銭面でも助けてもらっていますが、基本的に学生が一から考えて、活動も学生だけでやっています。これこそが学ボラの売りですが、責任が重すぎると感じることもあります。

特に現場では、クール長の責任が重すぎる。一学生が、宿泊先も活動先も自分で手配する。タクシーを予約し、道順を確認し、活動先へ連絡を入れる。全員が同じ行動をとるなら、そんなに難しいことはありません。しかし、今までお世話になったところとの個人的つながりもあり、いろいろなところへ出向くことになります。もちろん、参加する学生にとっても、いろんな活動があった方がいいと思いますが、大きな負担となっています。

活動の際には、意識して「クール長の負担緩和」のために、クール長以外にも協力を頼んでいます。ちょっとした連絡ミスが信用問題にかかわってくるため、できるだけみんなでもらうようにしているつもりです。

これからも学ボラには、「行動し続けること」が求められていると思います。ボランティアとして自分にできることって、本当にちっぽけで、役に立っているのかなって思うことばかりです。でも、そうして悩んで何もしないんじゃないじゃなくて、とにかく行動に移すことが大切だと思っています。

### 3-3 結論

活動の記述とリーダー2名へのインタビューをもとに、簡単にではあるが学ボラの気仙沼における活動の成果と課題を挙げて、本論文を終えることとしたい。

まず、成果から見ていきたい。

#### 1) 継続的な活動

震災発生後から現在まで、復旧から復興にむけてニーズは変化している。そのニーズの変化に対応しつつ、500人以上の学生を送り込んで活動を続けてきたことは、大きな成果として挙げられるだろう。さらに、その活動記録は気仙沼に関する情報発信ともなってきた。この情報発信がボランティア経験のない学生に対しての有効な呼びかけともなっている。

## 2) 東洋大学のネットワークを生かした活動

東洋大学のネットワークを生かした活動を初期から展開していることも、特徴の一つとして挙げてよいだろう。卒業生である小野寺と初期の段階でつながることができたし、大学からの資金協力も得られることとなった。震災発生後、最初のリーダーである幅野が力を傾注したのは、東洋大学の関係者との連携に道筋をつけることだった。学生にはやる気もあり、自分の力を無償で提供する心構えはあるが、毎回自分で被災地に行くお金はない。受け入れ先の確保や大学からの財政支援は、ボランティア活動継続の大きな支えとなってきた。

次に課題を挙げる。

### 1) 責任の分担

課題の一つとしては責任の分担が挙げられる。学ボラは、基本的には学生だけで活動を企画・実施している。そのためクル長を務める学生の責任が重いものとなっている。交通手段の手配や活動先への連絡など、個人にかかる負担が大きい。学生同士の責任の分担が課題となっている。

### 2) 社会人としての自覚を高める

受け入れ先の人々は、ときに「学生には社会人としての自覚が足りない」と感じているようである。初めてボランティアに行く学生に、「社会人として責任のある行動を心がけること」を、事前のブリーフィングで十分に説明する必要がある。

謝辞：本論文に掲載した写真は、すべて東洋大学学生ボランティアセンターから提供されたものである。記して感謝したい。

## [引用文献]

岩井雪乃 2012a 『学生のパワーを被災地へ！—「早稲田型ボランティア」の舞台裏』早稲田大学出版部。

---2012b 「学生の力を被災地に届ける：早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターの活動」『国際地域学研究』15号、40 - 49 ページ。

西山志保 2007 『改訂版 ボランティア活動の論理—ボランティアリズムとサブ死すテンス』東信堂。

子島進・五十嵐理奈・小早川裕子編 2010 『館林発フェアトレード—地域から発信する国際協力』上毛新聞社。

---2012 「東日本大震災におけるシャプラニールの支援活動：福島県いわき市での実践」『国際地域学研究』15号、31 - 39 ページ。

気仙沼復興協会 (K R A) [http://kra-fucco.com/volun/volu\\_photo](http://kra-fucco.com/volun/volu_photo)

東洋大学学生ボランティアセンター <http://toyo-gakubola.jimbo.com>

## Toyo University Student Volunteer Center's Activities in Kesenuma, Miyagi Prefecture

Susumu NEJIMA and Akiyo SUNAGA

Established after the Chuetsu Earthquake in 2004, Gakubora (Toyo University Student Volunteer Center) has been actively working as a student voluntary organization for the last ten years. When Tohoku Earthquake and Tsunami occurred on March 11, 2011, they began volunteer activities in Kesenuma, Miyagi Prefecture. Based on interviews to student leaders, this paper describes Gakubora's operations up to March, 2013.

**Keywords** : Tohoku Earthquake and Tsunami, Kesenuma City, Gakubora (Toyo University Student Volunteer Center)